

昭和 35 年度

春 山 合 宿

—北鎌尾根より穂高へ—

縦走隊報告

文責 後藤 紀彦

—はじめに—

今は亡き二先輩にかわって、私がこの悲しい記録を記さねばならぬということは断腸の思いである。

しかし私を除いて他に誰が縦走隊の行動を書き得よう。

私は山の記録とはどこまでもドライな、云はば機械と変わらない時間の積み重ねであってはならぬと思う。しかしそれがあくまで紀行文ではなく公の報告の形をとる時はある程度私的な感情を押さえなくてはなるまい。

この報告の内に、所々私の思い出といったものがあつたとしても、この際はお許し願いたい。

〈 Member 〉

CL 故 岩本 尹也
故 伊藤 国啓
後藤 紀彦

〈 期間 〉

昭和 36 年 3 月 28 日 — 4 月 13 日

〈 準備 〉

3 月 24 日 } 食料と装備の準備に大忙しする。やっと準備完了
25 日 }
26 日 } 26 日出発の予定であつたが、折しも降り始めた大雪は、雨を混じえて
27 日 } 2 日間も続いた。止むなく松本にて沈殿する。この雪は今後の計画に大きな影響を与えた。

〈 装備 〉

テント 3 人用 マナスル型
ザイル 40m ナイロン 1
40m 麻 1
三つ道具 カラビナ 12 (古カラビナを含む)
ハーケン 岩用 15 本
氷用 4 本
ハンマー 氷用 2
すてなわ 3

ラジュース 1、コップエル 3、ノコギリ、ナタ 各 1

食器 10

石油 4 リットル、マッチ、ローソク 若干

〈 個人装備 (共 3 人) 〉

オーバーシューズ、ウインド・ホーゼン、ヤッケ、ピッケル、アイゼン (岩本、後藤—門田、伊藤—R.C.C.)、シュラフ (始めて部で購入した化繊シュラフ使用)、エアーマット、セーター、ジャンパー、その他

※ 個人装備、団体装備共に軽くする事を考えて、化繊シュラフとナイロン・ザイルを購入した。この 2 つは著しく重量を軽くしたが、個人装備はどうしても多くなり、又、三つ道具等もデポの分と重複して、やけに多くなってしまった。

〈食糧〉

他の2サポート隊とほぼ同じ内容のものであった。

朝—モチ、野菜、かんづめ等の雑煮

昼—ビタパン／一人2個にマーガリン1/2本

夜—生米に、肉類を主にしたおかず

※ 従来と全く同じ内容の食糧であり、その上余分なものが多く途中で沢山捨ててしまった。雑煮のダシのかんづめ、天ぷら油、マーガリン、パン等である。

特に昼食は雪山の乾いたノドには全く通らず、苦勞した。その上、これもデボと重複した所が多く、非常なカサと重さになってしまった。

今後食糧（特に雪山における軽量化）については、充分研究の余地がある。

行 動

○3月28日（快晴）松本 → 湯俣

すっかり準備を整えて、26日出発の予定であったが、25日夕刻から雨が27日午後より雪に変わり、27日の夜迄降り続く。松本で23cm、21年ぶりの春雪とか。止むなく出発を延期。この雪が今後の計画にも大分影響して稜線に出る迄は春には珍しい大変なラッセルを強いられた。国啓さんが「皇太子夫妻が長野県訪問のせいだ」となげく事しきりであった。

28日、ここの所毎日早く起きて飯を作ってくれたサポートの人達に見送られて出発する。大雪なので心配だったが、バスは平常通り葛温泉迄入っていた。金のかかる里を去ってほっとしたのもつかの間、重い荷を背負って歩かねばならぬ。

荷は各自8~9貫程、第5発電所迄は踏跡はあったが、後はヒザ迄もぐる雪道の上に、所々道が崩れていて高巻きさせられる。あの雪が降らなければ、と時々雪煙をあげている急峻な山々を見上げるが、どうにもならぬ。湯俣に着く頃は真暗になって、全員フラフラしていた。途中濁小屋でソーセージを拾った事はせめてもの慰めだ。

湯俣では本館にもぐり込み、ネズミと一緒に寝る。岩本さんが買ってきたオーシャン、何とも云えずうまかった。

松本 6:52 電車 大町 8:00~8:05 バス 葛温泉 8:55 — 七倉沢 9:45 — 三ノ沢橋 11:45 — 濁沢の小屋 12:30 ~ 1:45 — 東沢発電所 2:40 — 湯俣小屋 6:20 Essen 8:20 schlafen 10:00

○3月29日（快晴後曇、無風）

昨日の様に靴の中に水がたまったりしたら沈痛だと、皆オーバー・シューズにわかんをつけたり、アイゼンをつけたり、思い思いの支度をして出発する。橋を渡って水俣川に入ると、たちまち難路ばかり。岸壁やイヤな雪壁をBushにつかまって高巻きして行く。古いステップがあったが、ともかくイヤな所だ。中東沢のあたりからはどうやら河原伝いに行ける。一度右岸へ移ったまでは良かったが、左岸へ移るのに大苦勞する。ずっと左岸ばかり行った方が良さそうだ。わカンを付けてフウフウ歩くと吊り橋に出る。春の雪は重くて暑い。ここから岸壁になっていて河原伝いに行けないので対岸の斜面を100m程登って捲く。非常にサラサラの雪で足場ができず、氣息エンエン、四つんばいで這い上る。そこから水平に森林の中をトラバースして行くとやっと天上沢の下部へ出た。荷物も重く、とても今日中に日大小屋迄行けそうにないので、さしあたって不必要な荷をここに残して、明日取りに来る事にする。

天上沢第一の吊橋を過ぎてからは高巻きする必要もなく、殆んど河原伝いに行ける。

国啓さん、持前の馬力をだしてラッセルしてくれる。幸い雪も幾分クラスとしてきて、輪カンが快適にきく。途中で豚みたいに丸々したカモシカにお目にかかる。北鎌側の小さなガリーからはデブリが一杯出ている。ビンボー沢の出会いには対岸の台地を通る。再び本流に出ると広い河原を夕方の風が吹き通している。真近にあまりに高く独標の一部と槍の穂先がそびえている、夕日に真白に光りながら。北鎌沢のビルディングの様なデブリに驚

きながら小屋につく。2日間苦闘したのでクタクタだ。2~3mの雪が小屋の上に積もっているのつぶれはしまいか、と危ぶんだが、どうせつぶれるならと風通しの少ない炊事場の方で寝る。ボロ小屋でも雪は殆ど吹き込んでいず、暗いだけが欠点だ。秋に荷揚げした石油カンを前のシラベの木よりおろして、うまそうな物をむさぼり喰う。喰う物は一杯あるので皆ニコニコしている。

起床 6:00 出発 8:00 中東沢出合いで昼食 10:10~45 大鎌沢の出合い 11:40 水俣川最後の吊橋 1:00 千天の出合いの上に荷物をデポする 2:00~2:30 天上沢の吊橋 (中食) 3:15 日大小屋 5:40 Essen 8:00 schlafen 9:00

○3月30日 (朝方は曇っていたが、間もなく快晴、西の風強し)

朝起きたが、思わしくない天気なので、これ幸いと寝ていると陽がさして来たので渋ぶ渋ぶ出かける。連日の arbeit で足腰が痛い。のんびりと昨日のデポに行く。春の水辺をポカポカ往復する。昨日の苦闘が嘘みたいに楽しかった。小屋に戻って Essen を整理する。装備全部と Essen 4日分を日大尾根の途中まで上げることにして出発する。一人 4~5 貫目程。小屋から天上沢を 500m 程つめ、右手の広い雪の台地目がけて森林帯を選んで登る。この台地は日大尾根より流出する沢の一部を成している。台地の右手の尾根は日大尾根の派生尾根では比較的大きい方だと思う。

我々には日大尾根への取付点があきらかになかったの、北鎌沢出合いからつめるよりも、中腹へ取付いて楽をしようと思ったのだ。こんな甘い考えが、後で非常な苦杯をなめる事になるとは思わなかった。尾根の下部はやゆるく、雪も柔かったが 600m も登ると非常に急斜面になったのでワカンでは歯が立たずに、荷をデポして帰る。帰りは森林帯ではなく、沢を降りてみたが、デブリでゴロゴロして非常に歩きにくかった。

起床 7:00 出発 10:00 ~ 前日のデポ地点 11:20 ~ 日大小屋に帰る 1:30 荷をまとめ出発 2:30 ~ 広い谷をトラバース、右手の尾根に取付く 3:30 ~ 尾根上に荷をデポする 4:30 ~ 日大小屋へ帰る 5:40 schlafen 9:00 風の音強し

○3月31日 (快晴) 沈殿

3日間の連日の Arbeit の疲れを取る為に休養する。暗い小屋の中で寝袋にもぐったり、外に出て白銀の槍を眺めたりして、楽しく一日を送る。こんなに素晴らしく晴れているといささか後めたい気がする。小屋の雨だれを石油カンに受けたりして、暇だと色々な事をやっている。槍の穂が春の強い光の為、天上沢の雪面に美しい陰影を作り出す。とても我々の地かざけそうもない程すごみのある美しさだ。

○4月1日 (快晴、無風) April fool

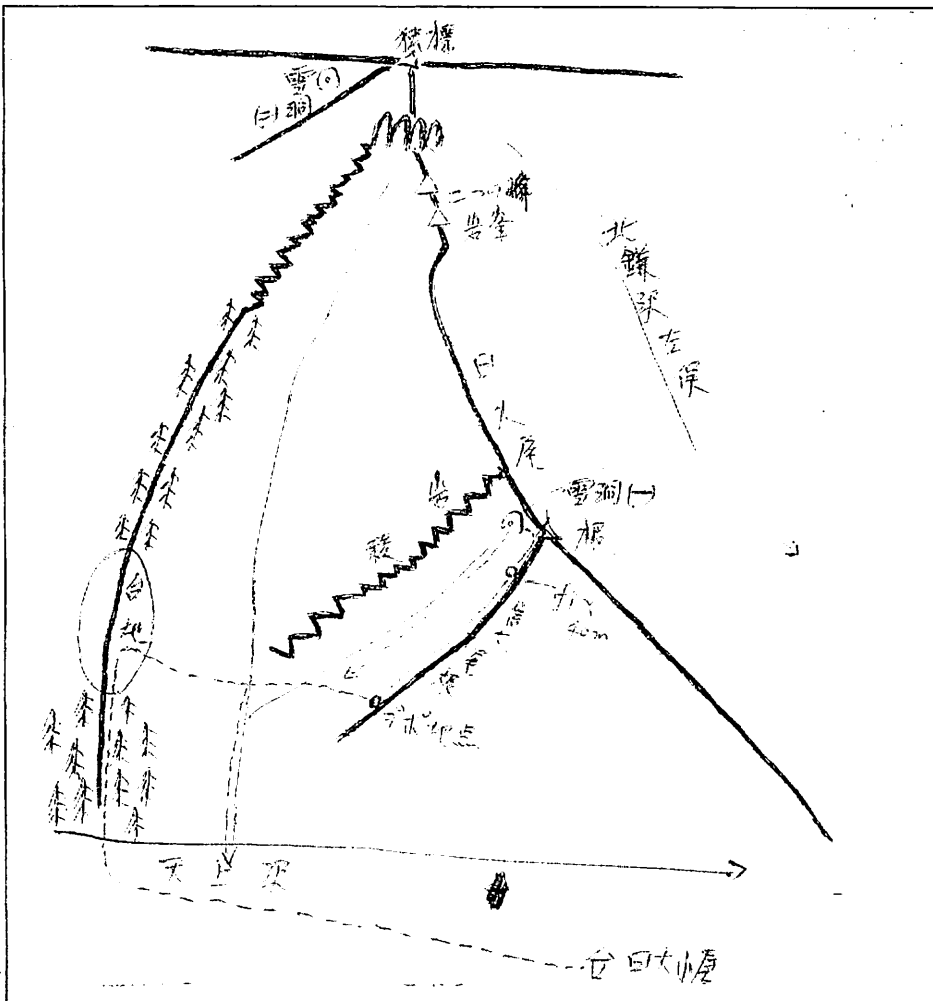
朝日の当たらないうちに沢を登ってしまう為に早立をする。今日は小屋から eisen で行く。前日のデポ点迄は沢をトラバース。時間を省略する。デポで 40m 麻 Seil のみを荷に加え尾根道しに登る。

無雪期には一面に大木の茂り合った尾根らしく、我々はその枝の上をすっぽりおった雪の上に行く。時々落ち込むとすっぽり首迄はまってしまう。それに所々いやな氷化斜面



や、オーバーハング状に雪塊の引かかっているところなどがあって、一足、一足、足場をピッケルで作らねばならぬ。国啓さん一人で大奮闘。木にぶら下がったり、グサグサの雪にピッケルをさしたりして大変な苦勞だ。その上、尾根の最上部には枯木の上に雪がキノコ状にのっか

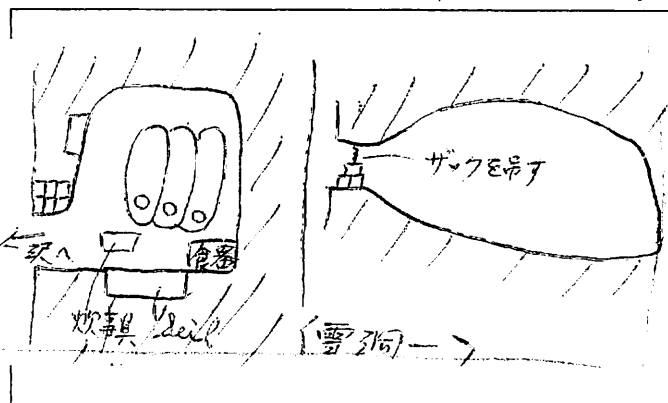
っていて、その下を通過せねばならぬ。40mのザイルを固定して、雨の様にシズクの落ちる雪塊の下をオッカナ・ピクリ念仏を唱えて通過する。おかげで木の根本にカモシカの巣らしきものを見つけたが、これでやっと日大尾根の主脈と合した。散々苦勞して登っただけに正直な所うれしかった。恐らく誰も通った事のないであろうこの尾根を“信大尾根”と命名して三人悦んでいる。もうBushに悩まされる事のない、スッキリした雪



の尾根にうれしくなってしまう、junctionの少し上に雪洞をほる。岩本さん、国啓さんは雪洞掘り。後藤は岩峰の下までラッセル。ずっと柔らかい雪でヒザ上迄あるが、単単としたものだ。岩峰の上の壁が問題だろう。雪洞に帰り、掘るのを手伝う。雪は多いので十分な大きさの物を掘り上げる。雪洞が完成してから、デポを取りに行く。尾根を降りるのは危ないし、時間もくうので、真下の沢を下りてしまう。非常に急で(50°)、いくら雪洞のブロックを落としたあとで、雪も硬く、日もかげっていた、とは云っても賢明ではなかった。折角安全の意味で尾根を通ってきたのだから、あくまで尾根通しにすべきだった。帰りは尾根を登る。

今日もフルに動いたので非常に疲れた。こう毎日往復しては3人で極地法をやっている様なものだとか笑う。始めて高い所で寝たので夜中はかなり寒かった。やはりこうなると羽毛の寝袋が恋しくなる。

起床 3:15 出発 5:50 ~ 前日のデポ地点 6:50 ~ 日大尾根へ



出る 11:00 雪洞完成後荷を取り
に出発 ~ デポ 2:35 ~ 再び雪洞に戻る 4:00

○4月2日(雪、昼頃より晴れ) 沈殿

寒い夜が明けてみれば、外は雪降り、天気予報なんて当てにならぬ。

昼迄グウグウ寝て目覚めてみると青空が見え出した。荷上げに出ようかとの話もあったが、完全に晴れ上がったのは2時すぎなので止めにする。入り口の雪を除けていると、表銀の稜線から盛んに雪煙が上がっている。新雪30~50cm、洞内は湿度多く、炊事の際にはポタポタ落ちる。高度の低いせいだろう(2500m位)。洞内-2℃、洞内の雪温-1℃

○4月3日(無風快晴)

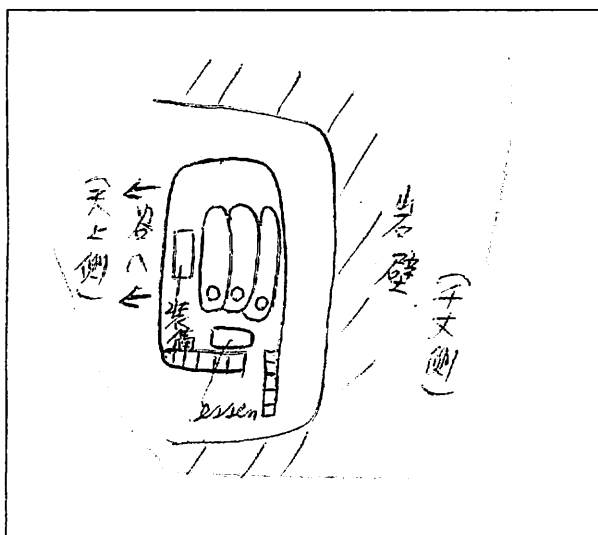
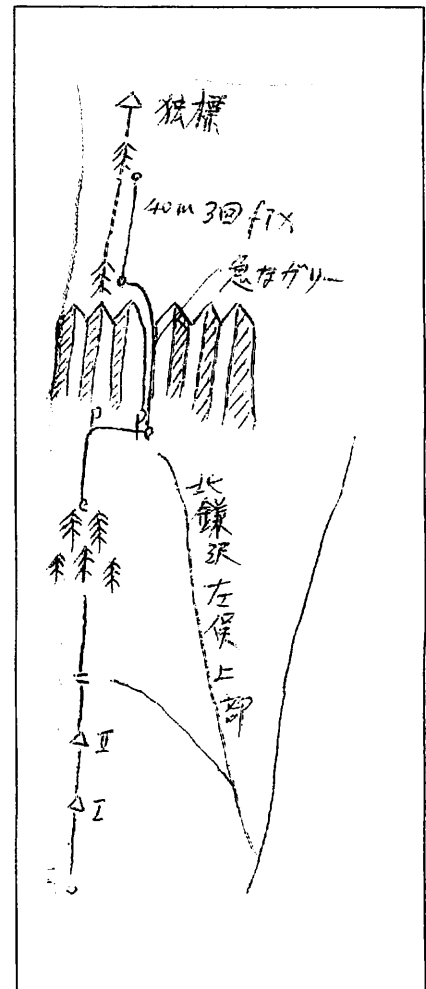
ノロノロと仕事をしたので出発はすっかり遅れてしまう。素晴らしい天気だ。昨日の新雪の為ヒザ迄のラッセルだ。第I、第IIの岩峰はなんなく乗り越えた。ただ急な雪稜を登り、下りするだけだ。独標奥壁もガリーを越すルートが見つかったので、思ったより楽に越せた。ただ足下よりスッパリと切落ちている北鎌の斜面はすごかったし、荷物を吊上げようとモタモタしていたら、北側のせいか凍えそうに寒かった。ガリーを抜けてからも70°程の雪稜なので慎重に登る。

団子になるアイゼンにイライラしながら登り切ると独標だった。雪洞は大槍へ向かって一つピークを越した所に掘る事に決めて、疲れた体にムチ打って再び朝の雪洞迄残りの荷を取りに戻る。北鎌の尾根に戻って来た時には、もう日は西に傾き、眼科の裏銀の山々は鈍く光っていた。大急ぎで雪洞を掘る。稜線の急にたるんだところに掘ったので勞せずして出来上がった。既に星のまたたき始めた外にお別れして、洞内の人となる。明日はあの槍を越えるのだ、と全員大張り切り。

起床 3:40 出発 7:10 2つもの岩峰を越える 8:40 ~
奥壁を抜ける 12:00 ~ 雪洞予定地 1:10~30 ~ 日大尾根の雪洞に戻る 2:30 ~ 雪洞予定地に帰る 4:10 ~ 雪洞完成 6:30

○4月4日(晴後強風)

朝方より不気味な天気だ。昼迄には槍を越してしまおう、食糧2日分だけで、5貫位の荷で出発する。



4月に入ったせいか稜線は夏道が出ている所が多く、その上小peakは千丈側をく事ができるので非常にはかどる。国啓さんに云わせると11月初旬の偵察の時より歩き良いとの事だ。岩は全く乾いているし、雪も適度に硬く最良のConditionだ。目前に迫って来る大槍の姿をにらん

で 2、3 度休む中に槍の基部に来た。2、3ヶ所ザイルの欲しい所もあったが、使はずにすませてしまった。ここから上はさすがに急で雪も硬く、荷を背負っては登れない。国啓さんが一人で空身で登っては張ったザイルを頼りに我々二人が続く。国啓さんは自分で荷物を背負い上げまたザイルを張りに登って行く。全く彼の一人舞台だ。私の手伝う隙も無い位、見事に処理して行く。40m 3 ピッチ半目に頂上の社の所へおどり出た。

大槍の登りはさすがに急で悪かった。雪もアイゼンを受けつけぬ程だった。だが全ては過去の事だ。遂に我々は北鎌尾根を登り切った。風の吹き通す頂きも最良のいこいの場所だった。我々は高揚した気持ちで下りにかかった。所が肩ノ小屋に面した夏道の下りは、ものすごい風だった。荷物を持つてはとても危ない。ザイルを *doppel* にして投げおろしても、軽いナイロンは風にあおられて、あつと云う間に高瀬川の断崖の方へ吹きあおられてしまう。悪戦苦闘して 6 ピッチ目にやっと下り切る。肩ノ小屋は無人だった。槍沢サポート隊の荷と山田さんの置き手紙があり、昨日ボッカに来た由。

夕食は甘い汁粉とラーメン。サポート隊に限りない感謝を捧げる。小屋がきしむ程の風の音を聞きつつ眠りにつく。

出発 6:30 ~ 大槍の基部 10:00 ~ 槍ヶ岳 12:00 ~ 肩ノ小屋 3:30

○4月5日（強風雨）

昨夕からの風雨、沈殿

もっとも天気が良かったとしても出発したかどうか、怪しいものだ。食い物は沢山、予定コースの半分は来たと一日中馬鹿ばかり云って暮らす。

○4月6日（曇、ガスと強風）

昨晩は風の音が一晚中小屋の窓を叩く。今日も沈殿。真白に凍りついて窓ガラス越しに、一面に氷がついた槍が見える。また冬に逆戻りだ。

午後より再び猛吹雪、真夜中迄 3 人で思い出話にふける。部の誰かれの事、合宿の思い出、ノロケ話、○○談、etc

思えば 3 人でこれ程色々な事を話した事は始めてだった。最初にして最後の歓談だったのだ。午前 2 時、ふと話がとぎれると風の音がしない。慌てて窓から見上げると凍る様な月がコウコウと白い山を照らしていた。

○4月7日（無風快晴）

翌日、起き出したのはなんと 10 時頃。素晴らしい天気だ。「沈殿するのに理由なんているもんか」とは国啓さん。でもいささか後めたい。始めの予定では好天が 2 日続かねば行動せぬつもりだった。大切戸を渡って穂高小屋迄は順調に行って 2 日。その間出来るだけ荷を軽くする為に 2 日分の食糧で突破するのだ。ラジオは明日小低気圧が出ることを告げている。だとすれば大いばりで沈殿だ。小屋の屋根でトカゲをきめこむ。雪面は吹き荒れた風雪のためカリカリに凍っている。穂先の氷がひっきりなしにカラカラと金属のヒビキをたてて滑ってゆく。世界一のサン・ルームだとうぬぼれる。

1 時頃、山田隊が槍沢の下に黒い点になって現れる。荷が重くて苦しそう。皆黒くなつ、すこぶる元気。連れ立って槍に登る。遠くから見ると真っ白に氷が付いたかの様だが、触ると皆落ちてしまう。

夜はにぎやかに食事をする。急に小屋が暖かになった様だ。

○4月8日（高曇り）

3 時に起きて見ると月が笠をかむっている。今日も駄目だ。一日飲んだり、喰ったり、騒いだり。槍沢で Stop ジッヘルの練習をする。制動確保なるものを始めて知る。実に効果的だ。

○4月9日（ガスと小雪）

今日も思わしくない。幸い食糧はたらふくある。まずは喰うことだ。

午後吹雪をつけて剣より来た北大の連中と同宿する。彼らが真白に氷を付けてヌツと入って来た時は、さすがに皆おし黙って、間の悪そうな顔をしていた。

明日は晴れるぞ。

○4月10日（無風快晴）

予想通り素晴らしい天気だ。一斉に準備をして出発する。穂高へ向かう我々、裏銀へぬける山田隊、下山する北大隊と、いつもの事ながら山での別れは感傷的だ。

息もつけぬ寒風も大喰岳を越す頃から治まり、春山らしいポカポカした日になる。雪面は雨でカチカチにクラストした上へ、昨日の新雪が吹きつけたので適度な硬さだ。中岳、南岳の広大な雪原にアイゼンを鳴らして行くのは良い気分だ。行手に北穂頂上の雪壁が陽を受けて、高く鈍く光る。一昨年の横尾尾根の経験から、「ここが硬雪だったら、荷を背負っての突破は極めて困難」と云う岩本さんの意見だったので3人は何度も不安げに眺めた。南岳の下りは、新雪が不安定についていたが、ほぼ夏道通りに通過。上のハンゴへの降り口が悪い。ザイルを出せ、出さないで国啓さんと私の中で大分もめた。いつも難場へ来ると2人の間で感情の衝突が起こる。冬の北尾根でも三峰の下りでもやってしまった。切戸のナイフ・リッジは2、3ヶ所非常にやせていて、またいで通る。風が吹いていたら、とても通れまい。いよいよ北穂の登り。夏道のペンキ印を頼りに第一の鎖場まで登り、後はリッジ通し。2、3ヶ所の氷化した部分を除いてはアイゼンが刺る程の硬さだったので大分楽をする。最後の雪面の登りは殆んど足場を切った。国啓さん一人で大奮闘。下から見たらテラテラ光っていたので、大分心配したが表面のみのクラストなので楽しかった。とはいえ膝のつかえる程の急斜面を、春の日にジリジリ照らされて登るのは決して楽ではなかった。頂上直下のゆるい斜面でやっとほっとする。

眼の下には春の午後に、べっとり雪をつけた潤沢の圏谷が眠っていた。目を凝らしても人影はない。切戸の底から一度休んだだけなので頂上にどっかりと腰をおろしたまま、誰も動こうとしない。ザイルは結ばなかったがもし用うるとすれば取付きで用意せねばならぬ。硬雪の斜面では荷を下ろして場所がない。まだ日は高いが、穂高小屋迄行く元気はとてもなく、北穂の小屋を掘るのに専念する。国啓さん独特の感で2m余の雪の上からピタリと掘り当てる。湿っぽい臭いのする小屋で先山下した越冬者の石油コンロを使って炊事をする。久しぶりの労働にグッタリしながらも、最難関を突破した喜びに話ははずんだ。

起床 4:00、出発 6:30 ~ 大喰岳 7:00 ~ 中岳 7:45 ~ 南岳 8:45 ~ 南岳を下り切る 9:45 ~ 切戸の底（昼食） 10:50~11:20 ~ 飛驒駈 12:15 ~ 北穂の肩 1:00 ~ 北穂頂上 2:40 ~ 小屋に入る 3:30

essen 5:30、schlafen 6:30

○4月11日（晴後曇）

今日はサポート隊に会えるぞ、とはり切って小屋を出る。一日分の食糧だけなのでザックは軽い。南峰の登りはキレツの入った潤沢側の雪面を目をつむって通過。

後は尾根通しが最も能率が良いようだ。滝谷側は高度感がありすぎて快適な斜面があっても荷をかついでは安心して通れない。潤沢側は雪がくさってステップが崩れる。潤沢岳の最低コルのすぐ上で一ヶ所滝谷側の狭いバンドをトラヴァースする。先登を試みていた国啓さん、「あっ」と云う声と共にピッケルを落としたが、何たる幸運。10m程下の硬雪にピッケルを出そうとした岩本さんのザックから今度は非常食を転がり出た。一瞬時に滝谷の奈落の底へと消えていった。この二つの事と後に起こった遭難事件を考え合わせると何か心に残るものがある。私はこれ以来何事も偶然の一事でもって割り切るには釈然たらざるものを感じる。

くさっていた我々は、思いもかけず最低コルで潤沢サポートの葛西、出島に会い、飛び上がって喜ぶ。岩本さんの第一声「モクをくれ!」。嗚呼、悲しき動物かな。タバコのみよ。

あると云う事を葛西より聞いたので、先に着いて空にしてやろうと云う魂胆だ。この方なら私も賛同を称するにやぶさかではない。澗沢岳直下はかぶり気味で相当に悪かったが、葛西達のステップがありたすかる。一気に小屋に駆けおりて、口を酸っぱくして、口説いたが、主計、奥島の二人、案に相違して守りは堅く遂に計画は駄目になった。

40分後に帰ってきた二人を加えて総勢7名。飯に、トランプに、苦勞話にワイワイ騒ぐ。待望のウィスキーは仲良く一杯づつ。民主主義を標榜する我が山岳部はやはりかくあるべきである。ラジオによると黄海に低気圧が発達したとの事、明日は沈殿とする。食糧もたらふくあるし、計画通り進んできて、大半は終了した気になって大いにタルむ。寝たのは何と翌日の1時。葛西言わく「縦走隊が来たら急に雑くなった。早く出発してしまえ」。

起床 5:30、出発 8:00 ~ 最低コル（葛西達と会う）10:00~10:30 ~ 澗沢岳 11:45 ~ 穂高冬期小屋 12:00

○4月12日（吹雪後ミズレ）

昨夜の疲れで9時に目ざめて見ると、案の定雪降り。こう思わくとおり事が運ぶと気味が悪い程だ。又トランプに熱中。岩本さんと葛西のご両人、煙草がきれて青い顔をしている。己が屋根裏から見つけ出したシケモクの罐に目の色を変えて飛びついた。

天気は一日雪。3時頃よりミズレに変わる。ベトベトした新雪が20cm程。天気図は複雑で良く分からないが、明日も見込もうらしい。夕刻出発に備えて装備、食糧の点検をする。麻ザイル、テントのポールはサポート隊に降ろしてもらおう事にする。肉は今日で皆無、野菜、調味料も足りないの、この上沈殿が続けば少し節食を要する様だ。

schlafen 7:00

○4月13日

遭難当日、この日以後は「遭難報告書」に載せましたので省きます。それに二度と書く気がしません。

以上の行動を精神的負担より考えたとき、次の4つに区分できると思う。

- 1) 松本より日大小屋まで
重荷とラッセルに体力消耗したが、まだまだ先があったので大いに張り切っていた。
- 2) 日大小屋より北鎌尾根より槍肩の小屋まで
難場に全く体力を使い果たして、小屋へ転がり込んだ。北鎌は予想より簡単だったし、半分は終わったと云う気分だった。
槍沢サポートの連中に会えた事も今迄の緊張の大いにほぐれた原因だった。
- 3) 肩の小屋より穂高小屋まで
2)での疲れは一週間近くの沈殿ですっかり解消した筈なのに妙に疲れた。そろそろ疲れが蓄積してきたのかもしれない。最難関と考えていた北穂の登りも終わったし、穂高の尾根も難しい所はすっかり通り抜けたつもりだった。そこで大いにたるむ結果になった。
- 4) そして遭難。
難場はすっかり通り抜けた気でいたので葛西達から吊り尾根の難しい事を話されてもピンと来なかった。非常に残りの行程を安易に考えていた。それにうまくゆけば一日で上高地へ、その為には最南峰迄の縦走をやめて前明神沢から降りても良いと岩本さん、国啓さんは考えていた様だ。ここ迄来たら、もう縦走の完遂よりも早く里に降りる事が先決になっていたと思われる。槍を過ぎた頃から三人の間でともすれば家の話でもち切りであった。

この様な精神的な推移を考えても、無理からぬ事とは思えるが、当時の我々としては“100里の道を行くものは90里をもって半ばとす”といった真理が全く念頭になかった。

最後に私としては出来るだけ詳しく、いろいろな面からこの山行を述べて見たつもりで

す。今は亡き二先輩にも非礼をあえてした所があったと思います。お許し願います。
合掌再拝して冥福をお祈りします。